
創造の魔法使い

幻想主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創造の魔法使い

【Nコード】

N3687M

【作者名】

幻想主

【あらすじ】

突然魔法の力を手に入れた一般人浅倉玲時が様々な世界で頑張っていく物語。結構最強になります

プロローグ（前書き）

意味不明な設定などがあつた場合教えてください

プロローグ

俺の名前は浅倉玲時。読書好きでめんどくさがりの普通の学生だった別によく見る転生系の主人公みたいにゲームやアニメにそんなに知識がある訳じゃないけど好きなゲームなんかについてはとことん調べたりしたそんな俺だったけど……

「聞えてますか？」

目の前にいる明らかに天使みたいな奴に出会う事なんて無かった筈だ

「聞えないのなら地獄逝きですよ？」

「聞えています！」

あぶねえ

いきなり地獄には送られたくない

「では貴方がなんでここにいるかを説明しますね。簡単に言うと貴方が根源と？がってしまったからです」

……何だつて？

「根源……？それってアカシックレコードとか言うやつの事か？」

「そのことです」

Fateは俺だつてやった事あるから分かる

でも根源と？がったつて

「何で俺が？」

「偶然です」

は………？

偶然？

偶然で？がるつて運が良いのか？

「本来魔法などの神秘が存在しない世界で根源に触れる事も出来ません。」

けど貴方は偶然？がってしまった」

何か悪い事でもあるのか？

「触れる位なら魔法の存在を認識出来ない世界の人間だから問題は無いんです。けど？がってしまつと

神秘を認識して魔法が使う事が出来てしまつんですよ。」

魔法の無い世界で魔法を使うと大変な事になるので他の世界に行つてもらうんです」

そうなのか

「けど俺は魔法なんて知らないぞ」

「今は私の力で抑えている状態です」。他の世界に行くと使える様になります」

じゃあまだ魔法は使えないのか

「そろそろ説明するのに疲れたので飛ばします」

「は？」

「貴方はこれから様々な世界を旅してもらいますから」

「おい！如何いう事」

言い終わる前に俺は意識を失った

ブローグ（後書き）

根源は基本アカシックレコードみたいな全ての事が記録されている
という設定です

第一話（前書き）

初めての戦闘描写

上手く書けてるか分かりませんが変な所があつたら教えて下さい

第一話

あの後には空から落ちるなんて事は無く普通？に森の中にいた

（貴方の魔法は『創造』です。今はあまり上手く使え無いと思うのでそこで魔法の練習をしてみてください）

そんな声が聞こえてきた

どこから聞こえてきたんだ？

まあいいか

でも創造か…

とりあえず色々実験してみるか

「凄いな、この魔法」

確認した事は

- ・ 武器、防具の創造（宝具などはBランクまで、無限に創造可能）
- ・ 魔力などの創造（自分の保有できる量だけ）
- ・ 能力付加

が出来る事が分かった

便利なのは魔力の創造だ

自分の保有できる分だけだがほぼ無限の魔力が得られるという事だ
能力付加は宝具では無い物に同じ位の力を持たせられるのは良い

これなら戦闘で死ぬ事はない筈だ

まあサーヴァントなんかには勝てないと思うが
根源からの情報から殆どの武器なんかは理解した
だからといって自分から戦うつもりも無いけど
などと考えている間に周りの様子が変わってきた

「何だ？」

もしかして死徒か？

ここがFateの世界なら可能性はあるだろう

「創造」

一応武器として干将・莫耶を創り出しておく

周りの木などで視界が悪い

こんなので後ろから来たら…

「ッ！！！」

視線を感じて振り向きながら剣を振るう

今まで感じた事の無いような嫌な感触を感じながら下を見る

「なっ！」

そこには頭の無い人の死体があつた…

足音がして慌てて周りを見る

（囲まれてる！）

全て人の形をしていたが全然人の感じがしない

（不味いな、逃げ道が無い！）

死徒に囲まれている為、逃げられない

ここでこいつ等を倒すしか無い

俺が正面から戦っても勝てない。なら

「創造」

死徒の頭上に現れる剣

それら全てに死徒を殺すという能力を付加する

そしてそれを落とす

全て外れる事も無く死徒の体を貫いた

（今だ！）

死徒を完全に倒した事を確認せず走り出す
ただこの場から逃げるために…

「はぁはぁ…」

全力で走りやつと森から抜け出した
あの場に居る事が怖くて逃げ出した
そして思い出す

首しかない体、切り裂いた時の嫌な感触
「うっ！」

我慢できずにその場に吐いてしまった

「はぁはぁ…」

化け物とは言え自分の手で殺したのだ
気持ち悪い

その場に倒れるとすぐに気を失いそうになる
その時

「大丈夫か！」

焦った様な声を聞いて俺は気絶してしまった

第一話（後書き）

第二話（前書き）

アクセス数が1000になって驚いた
こんな作品でも読んでくれる方に感謝します

第二話

「……ここ何処だよ？」

目が覚めたら見知らぬ部屋のベッドで寝てた

あれか？知らない天井だとか言えばよかったか？

起きて早々そんな事言える訳無いだろ

それにしても誰の家なんだ？

確認しようとして起き上がった時に部屋のドアが開く

「なんだ、起きてたのか。怪我はしてない筈だが大丈夫か？」

白髪のイケメンが声をかけてきた

…誰だよ？

話からして俺をここまで運んでくれた人だよな

「あなたは…？」

まず名前を聞いてみる

「オレの名前はバン。お前は？」

「浅倉玲時です」

「レイジか。森の入り口で倒れそうになってたのを見た時は焦ったぜ。

何であの森に居たんだ？最近死徒が出るから誰も近づけない筈だったんだが」

え、そうなの？

普通の森だと思ってた

俺が魔法使えなかったら死んでたのか…？

「なんでそんな事知ってるんですか？」

一応聞いてみる

何処かの魔術師かなんかだろう

「ああ、オレは元代行者だからな。今でも死徒を狩ったりするけどな」

「は？」

元、代行者？

たしか教会の戦闘集団みたいな奴の事だよな

魔術協会とかと仲が悪い筈だ

つて事は俺ピンチ？

「元、ですか？」

動揺を隠しながら質問する

「ああ。命令されるのが嫌になつたから逃げた」

命令されるのが嫌って…

なんで代行者になつたんだよ

ん？

待てよ、代行者つて結構強かつたよな

なら鍛えてもらえるかも

この世界じゃ強くなないと死ぬからな

「あの…」

「どうした？」

「俺を、鍛えてくれませんか？」

「何？どうしてだ？」

俺は自分の事を説明する

「なるほど。魔法使いね」

「はい」

あの後、ついでに魔法が使えるから他の魔術師に狙われるかもしれないから

鍛えてほしいと説明した

「……………」

これで断られたらどうしようか？

「いいぞ」

「へ？」

いいのか、そんなあっさり決めて

「いいんですか？」

「おう。面白そうだしな」

「ありがとうございます！」

俺はこの後の事を考えずに弟子入りが決定した。

第二話（後書き）

しばらくは戦闘が続くと思います

第三話（前書き）

自分で書いていて設定が崩れてきた…

第三話

バンに弟子入りした後、俺の実力を見るためにテストをした。
内容はバンと戦って五回攻撃を当てる事。

俺は宝具や能力付加した武器でなら勝てると思っていた。

けど負けた。

まさかあんなに強いなんて思わなかった。

怪我をさせなくなかったから木の棒に刺し穿つ死棘の槍の能力付加して攻撃したのに。

回避したんだぞ。

俺の創造が悪かったのか？

それともあいつの幸運が高いのか？

理由はよく分からなかったが因果の逆転を防ぐ程の幸運は持っているはずだ。

ありえないだろ。

セイバーでさえ当たったのに…

結果俺が当たった攻撃は一回だけだ。

当たったのは必中の弓フェイルノットで攻撃したのだけだ。

刺し穿つ死棘の槍でさえ回避したのに弓は当たった。
ゲイ・ボルク

俺は弱いのかと思ったがバン曰く俺は才能は有るらしいから大丈夫だろうと言っていた。

「詠唱が駄目なのか？」

あの後俺は一人で考えてた

（衛宮士郎は言葉は同じでも意味の違いがあつたな）

トレース・オン

投影開始と

トレース・オン

同調開始

これと似たようにしてみるか

「創造だから…クリエイトかな」

安直とか言っなよ

これしか思いつかないんだから

クリエイト

「創造」

フェイルノート

手には必中の弓がある

戦つてる時よりも完璧に創造できた

それにしてもこの弓はなんか馴染むんだよな

前から使っていたみたい

クリエイト

「能力付加」

矢に能力を付加する

それを木に向かつて放つ

矢は飛びながら十個くらいに増えて木に命中した

「よし、成功だ」

今のは矢が増えるという能力を付加した

一つ放てば十や二十に増えて当たる

フェイルノート

必中の弓で放てば別々の敵に当てる事も出来る

取り合えず魔法がより良くなっただけでも大きく成長した
この調子で頑張れば強くなれるだろう
そうすればこの世界でも生きていけるはずだ

第三話（後書き）

今回出したオリジナルの宝具について説明

フェイルノート
必中の弓

トリスタンが使ったという弓

人間でも獣でも狙った所に必ず当たるといふ

宝具としてのランクはBランク

放った矢は狙った所に必中する能力がある

本来の名前はアッキヌフォートというがこの作品ではフェイルノートと呼びます

第四話（前書き）

バンの台詞が無い…

第四話

俺の修行はバンと戦ったり、死徒を倒す事をしてたりする
バンと戦うのはとても疲れる
なんせ一日中戦う事なんだからな

それ以外だと色んな武器を扱ったための練習だ
せっかく武器の創造が出来るのに剣しか使えないなんてのは勿体無い
だからどんな武器でも扱えるようにしておけとバンに言われた

で、今は死徒と戦っている訳なんだよ

「炎よ！
flamme！ 燃え盛れ！
feuer！」

手にした剣をかざして詠唱する
敵の中心で炎が爆ぜる

（今ので六体は殺したはず。あと七体！）

後退して敵から距離をとる

剣をかざし再び詠唱する！

「風よ！
wind！ 打ち砕け！
zerschlaege s！」

風の弾丸が全ての敵を打ち抜く！

完全に殺したのを確認してから構えを解く

「予想以上に使えるなこの剣は」

先の戦いで使った剣を見る

見た目は刀身が様々な宝石で出来た短剣だ

宝石に魔力を込めて刻んである魔術を使う事が出来る

遠坂凜の宝石魔術だな

剣の銘はそのまま宝石剣とした

真似したとか言うなよ！それ以外思いつかないんだから！

まあ、あと八つの俺の切り札の剣がある訳なんだな

その内一つに纏めるかな。

テン・コマンドメンツみたく

第四話（後書き）

宝石剣の真似

主人公が魔術を使う為に創りだした剣

魔術師の杖の役割を果たすが剣としても一応使える
もっと強くなれば並行世界へいけるかもしれません

第五話（前書き）

誤字、脱字などがあつた場合教えて下さい

第五話

「はっ！」

剣を振るう

狙うは首

一撃で仕留めるつもりで！

「遅い」

左の黒鍵で防がれる

そしてすぐに右からの刺突

「ぐっ！！」

それを何とか防ぐ
だが体制が崩れた

「そら、死にたくなければ防げよ」

奴の持つ黒鍵が襲い掛かる

敵の剣は二つ

対抗するための剣を創造する！

「クリエイト！
創造！」

創りだすのは双剣

一つは炎のように紅く

一つは氷のように蒼い

炎と氷の相反する属性を持った剣

銘は蒼紅ノ太刀

名付けたのはバンだ

「はあ!!」

右の紅刃を振るう

黒鍵とぶつかり合う度に黒鍵の刀身が燃えていく

「ちっ!」

舌打ちしながら後退していく

(逃がすか!)

クリエイト
「創造」

すぐさま『フェイルノート必中の弓』を創り出す

そして蒼刃を歪め矢と創り変える

「ふっ!」

矢
剣を放つ

空間を切り裂きながら進む

止められるはずが無い

そう思っていたのだが…

デュランダル
「絶世の名剣!」

そう叫びながら剣を振るう

俺の放った剣と矢ぶつかり合う剣

そして

「うおおおお!」

防ぎきった。だが甘い

完全に防ぐなら消滅させるくらいやらねばな!

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

矢
剣が爆発する

爆発の余波によって見えないがおそらく気絶だろう
俺の創りだしたあの双剣はランクにするとAランクを超えるかも知
れない宝具だ

いかにあの馬鹿でもこれはさすがに堪えただろう
ちなみにデュランダルは俺が貸した

今回は俺の勝ちとなった

「もう勝てなくなってきたか…」

傷だらけのバンが呟く

「当たり前だろ。もう三年もやっているんだからな」

そう。俺がこの世界に来てからもう三年がたったのだ

その間は本当に戦いしかなかった

その中で何回か死にかけた事もあったし、片腕を失った事もある
失った片腕は創造の魔法を応用して創り出した

まあ、その際に色々な能力を付加したけど…

それで分かった事は肉体にも能力付加が可能な事だ

でもあまり多くの能力を付加すれば肉体が耐えられなくなるし、一
生続く能力付加となる

つまり永続的な付加になる。つけた能力は消せないという事になる

ちなみに今の肉体にはある宝具の能力を付加している
それは『ナイトオブオーダー騎士は徒手にて死せず』だ
これはかなり使えるからな

それ以外は肉体の基本的な能力を上昇させたくらいだ
それのお陰でステータスはほぼAランクくらいまで上がった
サーヴァントに勝てるかどうかは分からないが

それ以外にあった事といえば俺が魔法を使える事が協会とかにばれた事だな

それ以降は魔法使いとして認識された
なぜか二つ名までもらった
クリエイター創造主とか呼ばれている

けど魔法使いとして認められても命を狙われたりする
負けた事はないがめんどくさい

そんな事になりながらも俺はバンの家に居る
何だかんだいってもバンは俺の師匠だからな
この世界の唯一の知り合いだし、離れたくないんだよな
バンが死ぬ事なんて無いはずだし

第五話（後書き）

なんと三年が経っていたという事でした

いや、主人公が強くなるにはそれくらい必要なと思ひまして
短いかもしれませんが

決して書くのが面倒になったわけではありません

今回出た宝具は

蒼紅ノ太刀

炎と氷の相反する属性を持つ剣

長さは一般的な刀と同じくらい

ランクはA＋くらい

ナイトオブオーナー
騎士は徒手にて死せず

手にしたものを自身の宝具として扱う宝具能力

どんな武器であろうと手にした時点でDランク相当の宝具となり、

元からそれ以上のランクの手に取れば従来のランクのまま支配下に
置かれる

デュランダル
絶世の名剣

決して折れないという逸話を持つ「不滅の名剣」

所有者の魔力が尽きても切れ味を落とさない名剣

主人公設定

浅倉玲時

根源と？がつてしまい別な世界へと送られた

根源であり人である

使える魔法は創造

それによって武器、防具などを創り出し、様々な能力を付加させて戦う

常に対魔力の能力を付加した防具を着ている

肉体の老化は完全に無効化ではないがほぼ無効化してある

ステータス

筋力 B +

魔力 E X

耐久 A

敏捷 A

幸運 B

宝具 E X

スキル

直感 B

戦闘時、常に自身にとって最適な展開を『感じ取る』能力
視覚、聴覚に干渉する妨害を半減させる

魔力放出 A

武器ないし自身の体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる

対魔力 B +

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する
大魔術、儀礼呪法を以ってしても、傷つけるのは難しい

宝具

『クリエイト創造』 ランクEX

あらゆる物を創り出す魔法

武器、防具などを創造する事が出来、能力を付加することも可能

『クリエイトオブソード創造せし神の剣』 ランクEX

十の姿を持つ剣

それぞれの姿がほぼAランク相当の能力を持つ

第一の剣…白王

第二の剣…羅刹

第三の剣…ゲイル

第四の剣…蒼紅ノ太刀

第五の剣…麒麟

第六の剣…???

第七の剣…宝石剣

第八の剣…???

第九の剣…???

第十の剣…オメガ

第六話（前書き）

今日で三回目の投稿

テンション上がりまくって色々やっちゃったぜ！

第六話

その日、俺はいつも通り仕事で死徒を殺して家に帰るつもりだったけど近くの町で死徒が出たって話を聞いて少し遅れてもいいかと思いい倒しに行った
そうして二日遅れて家に帰った

「何だ、これは…」

目の前に広がるのは炎

小さな森の中にあつた家は燃えているだろう

なんせ森ごと燃えているのだから

それを呆然と見つめる…

「ぐっ…」

「っ…!!」

微かに聞こえた声の方に走る

いるはずだ。

あいつが死ぬわけ無いから

きつと敵を倒している

きつと……

「バン!!」

そこで見たのは…

「はあはあ、帰ったのかレイジ…」

片腕が無く、足も完全に焼き焦げていた
体中から血を流し今にも死にそうな様子のバンがいた

「ば、バン…?」

「はは、まさか魔王に会うなんて思わなかったぜ…」
微かな声で呟く

信じられなかった

あんなに強かったバンが死にそうになるなんて

「いいか、レイジ。早くこの場から逃げろ。奴にはお前はまだ敵わない。
すぐに離れろ」

そんな事出来る訳が無い

この世界で一人しかない俺の味方
バンがいなくなったら俺は…っ!

「そんな顔すんなよ。なんにも泣く事ないだろ」

バンの手が俺の頭にのせられる

「いいか、お前は俺の弟子だろ? だったら師匠の敵討ちはもっと強
くなってからにしろ。」

まあこんな事言うのも悪いけどな。けどこんな風に言わなきゃ引か
ないだろ、お前」

…そうだろう。何も言われなければ敵に向かうだろう

「な? だからさここは逃げろ。」

でも、俺には……

「しかたねえか……」

「え……？」

胸に手が置かれる

その手が握っているのはいつか俺が贈ったペンダント……

「それは？……まさか！」

「じゃあなレイジ。楽しかったぜ」

転送用の魔法道具！

「バン！」

必死で手を伸ばす

けれどその手は届く前に消え失せる

そして森は完全に燃え尽きた……

第六話（後書き）

はい、バンが死にました

結局最後までまともに会話できた描写がなかったな…

この後は数年くらい進みます

またかつて思いますが、すいません

こうしないと続きが書け無いのです…

第七話（前書き）

超グダグダになりました
なぜこうなった…

第七話

剣を振るう

唯、何も考えずに振るう

何度も何度も振るう

何体殺しただろう

どれだけ探しただろう

あの日から俺の目的はあいつを殺した魔王を殺す事

それから魔王が現れたと聞いたなら何処へでも行った

たとえ現れなかったとしてもだ

でもいたのは死徒だけだった

いや、あの時の魔王が生きているかも分からない

それでも探す

絶対に見つけ出す

手に持つ刀で切り裂いていく

今戦っている死徒はかなり強いらしい

だが、それでも俺は負けない

「ふっ！」

一撃

それだけで相手は死ぬ

ここにもいなかった

ならまた探すだけ

そう思い歩き出す

「お前が、魔王を探している者か」

行き成り声が聞こえた

「っ！！」

刀を構える

声の主は見えない

（何処だ、何処にいる…！）

「そこっ！！！」

自分の直感を信じ何もいない所を切る

「ぐっ！？」

見つけた！

相手の首を狙い刀を振るう

「くっ！！」

だが直前で止める

こいつには聞きたい事がある

「魔王を知っているのか」

今相手の命を握っているのは俺だ
知らないのなら殺すだけだ

「知っている」

「何処にいる」

「いずれここに現れる。いい加減嗅ぎまわられるのは鬱陶しいそう
だ」

奴は笑いながら答える

俺はその首を切り殺した

「そうか…」

笑みが浮かぶ

もう何年も探してきた魔王がここに来る
やっと殺す事が出来る

そして感じる強大な力
それが目の前に現れる

「お前が私を嗅ぎまわっていた者か。これはまた、随分と若い者だ
つたな」

来た

今すぐ殺したい気持ちを抑えて質問する

「お前が、バンを殺したのか？」

「一々殺した人間の事など覚えておらん。だが、いつか戦った代行
者は覚えておるぞ」

頭が真っ白になる

「あれは強かった。今まで私が戦ってきた中でも一番の強さだった。だからこそ、じっくりと殺してやったがな」

もう奴の言葉は聞こえない

頭にあるのは、唯目の前のコイツを殺す事だけ！

「はあああ！！！！」

刀で切りかかる

だが防がれる

「貴様は何のために戦う？」

決まっている

「復讐だ！！！！」

「羅刹！！」

刀の真名を叫び、力を解放する

「ぐっ！？」

奴が防いだ腕ごと切り裂く

「消える！！」

奴が叫ぶと同時に目の前に炎の塊が現れる
向かって来る炎を俺は

「はぁ！！！！」

切り裂く！

「何！」

真祖の空想具現化も切り裂く
マイブルファンタズム
そのまま奴に切り掛かる！

「人間が！！」

奴が残った腕を振るう
其れだけで俺の体は重さなど無いかのように吹っ飛ぶ

「がはっ！」

血を吐く

相手は魔王

この世界で最も強い真祖が全力を発揮している状態だ
だが負ける訳が無い

羅刹を変化させる

俺の切り札

第十の剣へと変わる

白き剣

魔剣でもなく聖剣でも無い
全てを消滅させる神の剣
それがこの剣

「the sword of the end」

相手を貫く

剣が光を放ちその存在を消滅させていく

魔王は一瞬でこの世界から消えた…

「はあはあ」

倒れこむ

流石にこの剣の発動は堪える

だけど殺した
バンを殺した魔王を

けど俺に目的は無くなった
如何すればいいんだろう

「単身で魔王を殺すとはのう。面白いな」

行き成り目の前に現れる老人
手に持つのは宝石の剣

「魔法使いか…」

「お主もじゃろう」
確かに

「何の様だ」

「お主に仕事を頼みに来たのだ。」

仕事だと？

「堕ちた真祖を殺してもらおうと思う」

俺はまた魔王を殺すのか
けどまあ

「いいか」

他にやる事も無い
ならばやってやろう

「そうか。ならばお主をある所へ送る。そこで魔王の情報を得る事が出来る筈じゃ」

そんな言葉と共に俺の意識は消えた

第七話（後書き）

ついに？魔王を殺しました

え？早いって？

長引かせても駄目かなあ〜と思ひまして

次回からまた魔王殺しが再開します

宝具紹介

羅刹

通常は切れ味の良い刀だが真名開放すると魔術、魔法なども切る事が出来る

オメガ

白き神剣

この剣で切られたモノはその存在を消滅させられる

玲時の切り札

衝撃波でも消滅させる事が出来る

玲時でもこの剣の存在を維持させるので魔力の創造があまりできず発動できたとしても使用者までダメージを受ける

第八話（前書き）

超適当な駄文になった…

第八話

目が覚めたら真祖に出会った
咄嗟に剣を創造した俺は悪くない
その後に殺されそうになったが

色々説明されて、彼女が魔王の情報をくれるらしい
俺の仕事は魔王を殺す事
単純だ

彼女の名前はアルトルージュ・ブリュンシュタッドというらしい
そんな奴いたかな」と記憶を掘り起こしている時に紹介された奴が
いる

リイゾーバル・シュトラウトとフィナ・ヴラド・スヴェルテン
黒騎士と白騎士と呼ばれているらしい

リイゾには剣術を教えてもらいたいと思った
仲良くなれそうだ

だがフィナは駄目だ
俺を見る目が危ない
なるべく近寄らないようにしたい

そして死徒二十七祖の第一位がいた事に驚いた
死ぬかと思った…

プライミッツ・マードというらしい
人類に対する絶対的な殺害権利を持つという
勝てるわけ無い

ここでの暮らしは魔王を殺しに行くかここでのんびり過ごすことになった

十年もすると多重次元屈折現象が出来るようになった

擬似的な燕返しも出来る

最大で五つ同時に放てるようになった

魔王も昔より楽に殺せるようになった

何でも俺に出会つと死んでしまうという噂があるらしい

魔王だったら殺すが人間はあまり殺さない

流石に抵抗がある

そしてそんな生活が二十年も経った時にある情報が俺に届いた

第四次聖杯戦争が開始されたという情報だった……

第八話（後書き）

次回から聖杯戦争に関わっていきます

アルトとかの会話が無いのは口調などが分からないからです…

自分、月姫とhollowは未プレイですから書けないと思います

第九話（前書き）

今回から聖杯戦争に絡んでいきます
キャラが上手く書けるか分かりませんが変だと思いましたら教えてください
ください

第九話

聖杯戦争が開始されたと聞いた俺はすぐに日本へ行く事にした
アルトに色々言われながらも何とか日本へたどり着いた
帰ったら死ぬかもな…

「行方不明事件か…」

冬木に着いた俺が聞いたニュースに取り上げられていた事件だ
恐らくキャスターの仕業だろう
という事はセイバーとランサーは戦った後か？

記憶が不確かだな

ま、いいか

たしかアインツベルンの城に行く途中にセイバーとキャスターが出
会う筈だ

その時にでも会ってみるか

夜道で人が殆ど居ないとはいえ百キロもだして走るのはどうかと思う
だがもう少しでキャスターが来るはず

その時に襲撃するか

しばらくすると車の前に一人の男が立ち、道を塞いでいる

「あれか…」

創造で弓を創りだして置く

キャスターの叫び声が聞こえる

かなり響いているんだが結界でも使っているのか？
誰か気づいてもおかしくないだろうに

「さて、そろそろやるか」

弓を構える

狙うはキャスター

「ふっ！」

矢を放つ

だが、ぎりぎりで避けられる

キャスターが消えてからセイバーの下に歩き出す

先程の攻撃を警戒してか周りに注意を払っていたのですが気づかれた

「誰だ！」

セイバーの声が響く

「危ないと思い助けたのだが、迷惑だったかな？」

セイバーはすぐに剣を構える

マスターは警戒しているのかセイバーの後ろに下がる

「何者だ、答えろ」

声に殺気を含ませて質問してくる

「何者、か。そうだな、俺は魔法使いだよ。騎士王殿」

セイバーとそのマスターが驚く

セイバーの真名が分かった事に驚いたのか、俺が魔法使いという事に驚いたのか、どっちだろうな

「魔法使いだと!？」

どうやら後者のようだ

「後ろのマスターは聞いた事が無いか？創造主と呼ばれていたのだが」

自分の二つ名を言ってみる

「創造主…っ！セイバー離れて！」

マスターが叫ぶ

「？、何故ですアイリスフィール」

「本当に創造主ならいくらセイバーでも…」

その言葉を如何思ったのか
行き成りこちらに殺気を向けてくるセイバー

「例えば魔法使いだとしても魔術を使うなら私は負けません」

その自身は自らの剣の腕からか。
対魔力からか分らんが

「それは有り得ないなセイバー。俺が負けるといふのは絶対無い。
それが騎士王だとしてもな」

さて、どうなるかな…？

第九話（後書き）

主人公行き成りセイバーを挑発
次回はセイバーと戦う事になりそうです

第十話（前書き）

セイバーの性格がおかしいと思いますすが気にしないでほしいです…

第十話

「はぁ！」

セイバーが剣を振るう

魔力放出による底上げされているとはいえかなりの速さだ
だが俺も剣で切り返す

「っ！」

そのまま鏢競り合いの状態になる

「行き成り襲つて来るとはな。礼儀を知らんのか」

「ふざけた事を！」

だが相手はセイバー

徐々に押され始める

（やはり強いな…。だが負ける事は無い）

そうだ、負けるはずが無い

あらゆるモノを創りだす俺がセイバーなどに負ける訳が無い！

「はぁ！」

勢いを一転させ切りかかる

この剣は『白王』

第一の剣であり全ての剣の原典

故にこれは俺の能力付加を何度でも重ね掛けができる

付加させた能力は魔力を奪っていく能力と

竜殺し

セイバーは竜の因子を持っているからこの能力を付加させている

「くっ！　がはっ！」

俺の一撃がセイバーを斬る

魔力を奪われ力が発揮できない状態に竜殺しの能力だ
動きが鈍って攻撃をかわせなかったか

だが直感によって致命傷は避けたいらしい

「はあはあ…その剣は…」

予想以上のダメージに驚くセイバー
だが剣の能力に気づいたらしい

「察しの通りこの剣は竜殺しの効果がある。君には効くだろう？」

笑って答えてやる

「はあはあ…」

しかし剣を構えを解かないセイバー
まだやる気が

「駄目よセイバー！逃げて！」

マスターが叫ぶ

ま、十分戦ったしもういいか

剣を消す

「勘違いしているようだが俺は戦いに来たわけでは無い。少し話したい事があって来たんだ」

そう言うとセイバーとマスターが驚いた顔をした

「……分かりました。戦う気が無いのでしたら剣を収めます」

セイバーが剣を収める

どうやら聞く気にはなっただけだな…

第十話（後書き）

セイバーに勝ってしまった玲時君

まあ、セイバーは片手しか使えない状態だし

竜殺しとかの能力を付加させてんだから勝てると思いました

宝具

『白王』

第一の剣であり『創造せし神の剣』の原典となった剣

その能力は能力付加を何度も重ね掛け出来る事

通常の武器や宝具などには多くの能力は付加できないが

この剣はどんな能力でも付加できる

第十一話（前書き）

短いです

書く暇が無い…

第十一話

今回の聖杯戦争での目的がある

一つは自分とサーヴァントの戦闘能力の確認
自分がどれ位サーヴァント相手に戦えるか

記憶が薄れてきて分からなくなったサーヴァントなどの情報を得る
ためだ

これについてはどこかのマスターに協力させてもらえばいい
切嗣なら俺の利用すると思い協力を申し出る事にした

もう一つは興味本位

ただ記憶にある事だったから実際に見てみたいと思ったから
それだけだ

「私達に協力するだど？」

「ああ。俺はサーヴァントという存在がどれ程の能力を持っている
のか。

それに対して自分はどれ程戦えるかを知りたいだけだ」

「……」

「悪い話では無いだろう？」

サーヴァントと同等の能力を持つ者が一人増えるだけで戦力は上がる
からな。

俺はサーヴァントと戦えるのならどんな事でもしよう」

「……」

随分悩むな

切嗣なら受けると思ったが違ったか？

「マスターからの了承を得ました。こちらの命令には逆らわない事が条件ですが」

どうやら良かったらしい

これで目的の一つは達成できるな

「分かった。これからよろしく頼むセイバー」

手を差し出す

「？」

だがセイバーはよく分かってないようだな
分かんと思ったんだが

「握手だ」

「え？」

「これから共に戦うのだ。その為に、な」

「…分かりました。よろしく頼みます」

セイバーと握手を交わす

一応セイバーには信用された様だな
あとは何とかなるといいな…

第十一話（後書き）

セイバー陣営と協力してサーヴァントと戦おうという目的
これからはどんどん戦っていきます

目標はギルガメッシュをボコボコにする事（笑）

第十二話（前書き）

微妙な出来

切嗣の口調が分からない

第十二話

俺は現在アインツベルンの城に居る

あのは切嗣の事を紹介されて、今後は切嗣の命令に従う事となった
ギアス
勿論強制を使つてな

ルールブレイカー
いざとなつたら破戒すべき全ての符を使えばいい

そして今は切嗣達が作戦会議をしている

内容はキャスターを倒すという内容のはずだ

俺は一緒ではなく部屋の外で待っているのだが…

中では揉めているようだ

セイバーの怒鳴り声が聞こえる

それを聞き流して別な事を考える

（現状は全てのサーヴァントが生き残っているはずだ。

だとすれば最初に消えるのはアサシンかランサーのどちらか？）

最後の戦いでは三騎士とライダー、バーサーカが残っていたのは覚えて
いる

ならば俺が倒す事になるのはランサーかキャスターか

まあ、どちらでも負ける事は無いが対策を立てておくに越した事は
無い

そんな時、アイリスフィールが侵入者を感知したらしい
俺達はサロンにある水晶球から侵入者の映像を見ていた

「こいつが、例のキャスターかい？」

切嗣がアイリスフィールに尋ねる

「ええ。でも…何のつもりかしら？」

アイリスフィールの言うとおりキャスターは何故かは分からないが子供達を連れている

「アイリ、奴の位置は？」

「城から北西に二キロと少し。深入りしてくる気配は無いわ」

敵は結界のギリギリの所をうろついているらしい
深入りせずに来ない様子を見るとこれは…

「畏だな」

「ああ、そうだね」

切嗣は冷静に返す

「で、どうする？ 誘いに乗るか？」

「…じゃあ魔法使いの実力を見せて貰おうか」

やっぱりか

「了解した」

すぐさま俺はキャスターの所へ行く
さて、ここで実力を見せようか

「マスター、なぜ彼を行かせたのですか。
彼で無くとも私が行けば……」

セイバーは納得出来ていないようだった

「それは彼が負けると思うからかい？」

「いえ、ですが相手はサーヴァントです。いくら強くてもキャスターのクラスの奴には……」

確かにいくら強くても相手は英雄と呼ばれた人物
しかもクラスはキャスター

勝てないと思うのも無理は無い
だが、仮にもセイバーを圧倒した者がキャスターなどに負けるだろうか？

「別に勝てずにここで死んでもかまわないよ」

切嗣は如何でもいいように返す

「なっ…！」

セイバーが驚きの声を上げる

「彼がここで死んでも僕達には全く被害が無い。

そうじゃなくてもキャスターを相手してくれる内に他のマスター達を倒す事が出来る」

切嗣の言っている事は正しい

協力関係だが命を守る事など契約には入っていない

しかも玲時の目的はサーヴァントと戦う事だ

切嗣は契約を守っている

仮に行かないと言ってもこちらの命令は聞くという強制が掛かって
いるから

結局は行く事になる

たとえ死んでもこちらに被害が無く、他のサーヴァントとも戦ってくれる道具

そんな認識しか切嗣には無い

「マスター、貴方は！」

「切嗣、どうやら新手が来たみたいよ」

「分かった、アイリはセイバーとここに居てくれ。舞弥、護衛を頼む」

切嗣はセイバーと話す気はもう無いらしい

「分かりました」

夜の暗闇の中、炎が燃え上がる
森ではすでに戦いが始まっていた……

第十二話（後書き）

戦闘は次回という事で
まだ考え中です…

第十三話（前書き）

おかしくなっ
たかも

第十三話

俺がキャスターを視界に捉えたときには既に五人ほどの幼児の死体があった

「…っ」

いくら関係無いといっても子供が死んでいる姿を見れば怒りが生まれる

今すぐに奴を殺したいという感情を押さえ込み話し掛ける

「…なぜ子供を殺した」

これだけは問わなければならない

「ふふ、貴方には分からないでしょうね。この子供達が味わった絶望が。」

ですが、この程度など悲劇には値しませんよ。ジャンヌを喪ってより重ねてきた私の所行に比べ…」

奴の言葉は聴く価値も無い

だが、子供を殺したのが許せない
無関係な者を理不尽に殺す事は…

「はあ！」

蒼紅ノ太刀を創りだし斬りかかる
刃は奴の首を

「危ないですね」

後ろから伸びて来た触手に阻まれた

「何！」

咄嗟に後ろを向き触手を切る

何処からこれを召喚したか確かめる為に

「なっ！？」

子供達の体を破り、海魔が現れる

「子供達の血肉を介して召喚しました。気に入りましたか？」

奴は俺の驚く顔を見て笑っている

子供達は最初からこの為に連れて来られたのか

冷静になる

奴を倒す為に必要な力を創りだす

嵐を巻き起こしながら剣が完成する

風の力を司る剣を握り締める

「…切り裂け」

そう呟く

それだけで周りにいた海魔は風の刃で切り裂かれる

「キャスター…」

「まだですよ」

だが海魔を何度も召喚してくる

敵の数は減らない

だが、構わない

敵がどれだけ居ようと全てを殺し尽くし
奴を殺す！

「はああ！」

剣を一閃

それによって巻き起こされた風の刃は海魔を切り裂く

「ふっ！」

敵の中心に飛び込む

「吹き荒れる！」

俺の体を中心に嵐が吹き荒れる
周りにいた全ての敵を薙ぎ払う

「貴方に構っている暇は無いのですけどね。私は一刻も早くジャン
ヌに会わなければなりませんから」

「待て！ くっ」

キャスターが城に向かう

止めようとするが海魔に邪魔される

「くそっ！」

必中の弓を創りだす

矢に魔の属性を持つものを消滅させる能力
さらに矢が増える能力も合わせる

フェイルソフト
「必中の弓！」

矢を放つ

対象は全ての敵

寸分の狂いも無く全ての敵に命中する

魔の属性を持っているから海魔は消滅していく

「逃がすか！」

もう一度狙いを定める

キヤスターを殺すために矢を放つ

しかし、それは海魔に阻まれる

「くっ」

その時キヤスターに赤の槍が襲い掛かる

「何っ！？」

だがキヤスターも寸での所で避ける

「大丈夫か、怪我は無いようだが」

赤と黄の魔槍を持つサーヴァント

「ランサー！」

なぜ来た

ここに来たという事は…

「キャスターを討ちに来たか」

「ああ、サーヴァントではないのによくここまで戦った。本来はここでお前を始末するようだが…」

ランサーが魔槍を構える

「休んでいる。俺が倒す」

そう言った

だがそれは駄目だ

奴は俺の手で殺す

「いや、俺はセイバーの協力者だ。俺も協力する。奴は必ず殺す」

弓を構える

「邪魔です！ 私はすぐにジャンヌの所に行くようなのです」

プレラーティーズスヘルブック
キヤスターが螺湮城教本を構える

「行かせない、貴様はここで殺す」

第十三話（後書き）

駄目だ…

主人公の性格が分からなくなってきた

まあ、大丈夫だろう

宝具は詳しく決めてから紹介します

第十四話（前書き）

キャスターとの戦いはもう少し続きます

第十四話

「…埒が明かな」

ランサーの言葉は最もだ

あれからかなりの数の海魔を倒したが減る気配は無い
足元には夥しい程の海魔の姿がある

「確かに。ならばアレを攻撃するしかあるまい」

視線の先には羅湮城教本がある
ブレイクティーズスベルブック

破戒すべき全ての符なら無効化できるか？
ルールブレイカー

…だがここで使う訳にはいかない
まだ使うべき所がある
ならばランサーか

「ランサー、あの宝具をどうにかできるか？」

ランサーに問う

「ああ、俺の破魔の紅薔薇なら一撃でもあたえればいい」
ゲイ・ジャルグ

ランサーが紅き魔槍を構えて言う

「そうか、なら任せる」

弓を構える

「なに？」

矢に魔力を込める
能力は魔を消滅させる能力

「道を開く、一撃で決めろ」

ランサーは意味を理解して笑う

「任せろ」

矢を放つ

矢は無数の海魔を消滅させながら進む
そしてキャスターの目の前に来たときに言葉を言う

ブローケンファンタズム
「壊れた幻想」

瞬間、矢が爆発する

宝具としては最低ランクとして創り出したから威力は高くない
だが視界を奪う事はできる

「くっ、こんなもので…」

キャスターの声が聞こえる
場所は分かった
後はランサーの仕事だ

「うおおおお！！！！」

ランサーが駆ける

狙いはキャスターの宝具

「なっ！？」

キャスターの驚く声が聞こえる

「ゲイ・ジャルク 決れ、破魔の紅薔薇！！」

ランサーの魔槍がキャスターの宝具を貫く

そうして宝具が無効化された事により、魔力供給で現界していた海魔も依代である血に戻る

「貴様ッ！」

キャスターが怒る

だが奴の宝具は無効化された

「これでチェックだ。キャスター」

第十四話（後書き）

原作のセイバーとランサーのような感じになりました
説明は大丈夫だっただろうか・・・

前回の宝具

ゲイル

風の力を持つ剣

所有者は敏捷が1ランクあがる

さらに風による魔術、攻撃なども1ランクあがる

第十五話（前書き）

かなり遅くなりました
忙しかったです・・・

第十五話

「しまった……、完全に忘れてた……」

俺の前にはライダーとそのマスターがいる
場所は……

「ライダー、何をしに来たのだ」

そう

アインツベルンの城だ

あの戦いは結局はキャスターに逃げられた

ランサーのマスターが襲われたらしい

動揺した隙を突かれて逃げられた

まあ、逃げようとする隙に一撃喰らわせてやったがな

マスターは切嗣に襲われたのだろう

俺とランサーがキャスターと戦っている内にマスターを襲ったようだ

ま、予想はしていたが

セイバーはずっとアイリスフィールの護衛だったそうだから連れて行ったら大変な事になるからな

その後は城に籠りキャスターが再び来るのに備えた
だがあの後からキャスターの足取りは掴めない

そうして日が過ぎていった今日

ライダーがここに来たということだ

ていうか

「酒盛りで真剣勝負になるのか？」

謎だな

奴のマスターは常識がある奴らしい
まあ、なんだか苦勞する感じがする

今回俺は酒盛りはしない

王などではないからな
というかあのギルガメッシュが来るんだ

ここはセイバーに任せるべきだ

なんだかあちらの雰囲気・・・特にセイバーの感じが悪い
酒盛りであんなになるんだな・・・
不思議だ

もう少し見ていたいけどどうやら客が来たらしい

「どうする、アイリスフィール？」

今回は切嗣がいないから俺への命令権は彼女にある

「見張られてたわけね・・・、戦えるわね、レイジ」

「当然だ」

「な、何いつてんだよ!？」

ライダーのマスターが叫ぶ
何かおかしい事でもあったか？

「どうした、ライダーのマスター」

「どうしたじゃない！ 人間がサーヴァントに敵うはず無いだろう！」

「ふむ・・・」

確かに

人間ではあれらに勝つ事はほぼ不可能だろう
だがな

「何事にも例外はある、もしかしたら英霊に勝つ事ができる人間がいるかもしれないぞ」

そんな事を言いながらアサシンの前に跳ぶ

「すまないがお前達の出番は無いぞ」

酒盛りをしていた奴らにいう

「なんじゃ、お主があれの相手をするのか？」

ライダーが聞いてくる

「ああ、アサシン如きに勝つ事など雑作も無い」

「ふむ、だがあれは人が敵うものでは無いぞ」

剣を創り出す

「お？」

「別に絶対敵わない事はない。うまくやれば勝てる相手だ」

自信を持つて答える

「まあ、そこで見ている」

そう言つて敵の中に駆けていく

「ふっ！」

目の前のアサシンを切り裂く

だがアサシンからすれば大したダメージでもない
一体殺したところで無数のアサシンがまた襲ってくる

放たれる短刀ダークを弾き、そして敵を切り裂いていく

動きは素早いがそれだけだ
セイバーの様な力も無い
取るに足らない相手だ

だが数が多い

一体一体斬っていたら時間の無駄だ

一気に勝負を決める

「奔れ、『麒麟』」

剣の真名を呟く

同時に剣から雷が迸る

そして・・・

一瞬にして数十体のアサシンが切り裂かれた

「ッ!？」

アサシンの驚きが伝わる

すぐさま俺から離れ様と後退するが

「遅い」

そんなものは意味も無い

どれだけ離れ様とこの狭い場所では逃げられない

そこからは一方的な戦いだった

正体不明の攻撃に戸惑い、逃げるアサシンを殺し尽くした

そんなに強くなかったな

「面白い奴だなお主は！」

笑いながら背中を叩くライダー
地味に痛いんだが・・・

「何の様だライダー」

「人でありながら英霊を殺し、あのような剣まで持つ。お主、余の臣下にならんか？」

突然の勧誘
だが動じない俺

「悪いが誰かの下につくような事はできない。命令などを聞くのは嫌なんだ」

こちらに目的が無い限りはな

「命令なんぞせんから、臣下にならんか？」

しつこいな・・・

「ならんよ」

「ふむ、どうすればいいかのう・・・」

かなり本気で考えている様なライダー
馬鹿かコイツ？

「まあ、それは後で考えるか。それとさっきの攻撃はどうやったんだ？」

「ん？ ああ、あれは魔法だよ」

「魔法？」

怪訝な顔をして聞いてくるライダー

「ああ、あれの能力は雷を操る能力ともう一つ・・・使用者の体を電気と化して高速移動を可能とする能力だ」

あれは雷を能力を持つ剣を創り出していたら偶然できた能力だが長時間使用すれば肉体が耐え切れず消滅する危険もある

「魔法だと？ お主魔法使いなのか？」

「ああ、創造主と呼ばれている」

今思うとかなりイタイ二つ名だな・・・

「ほお、魔法使いか。もっと欲しくなったぞ！」

なんだか余計に好かれてしまったようだ

「その雑種」

・・・最悪だな

「何か用かアーチャー」

嫌な顔を隠さず振り返る

「貴様のその剣を我に献上しろ」

なんて笑いながら言った

「・・・は？」

「この世の全ては我のモノだ。ならばその剣も我のモノだ」

意味が分からん

「お前の宝物庫にもあるだろ似たようなものが」

「無い、だからそれは我のモノだ。すぐさま献上すれば命は残してやる」

・・・かなりの暴君だな

第十五話（後書き）

ギル様はこんな感じでしょうか

まあ変な口調だったりしたら教えてください

宝具紹介

『麒麟』

雷を操る能力と使用者の体を電気と化して高速移動を可能にする能力がある

二つ目の能力は長時間使用すると肉体が耐え切れず消滅してしまう危険がある

第十六話（前書き）

週一での更新になります
すいません

第十六話

目の前のアーチャーをどうしようか考えてみる

倒すか？

いや、まだ駄目だ

最後の戦いは見たいしな

逃げる？

それが良いかもしれない

でもここから逃げても追われそうだな・・・

剣を消すか

それで諦めてくれるといいがな

手にしている麒麟を消す

「あの剣は消滅した。あまり長くは存在させる事はできないんでな」

まあ嘘だが

「ふん、もう一度創ればいい」

それでも諦めないアーチャー

「創り出したとしても時間が立てば消えるぞ」

「ならば消えぬモノを創り出せ」

コイツ・・・
仕方ないか

「ほら、これで消えない筈だ」

剣を創り出してアーチャーに投げ渡す

「最初から素直に渡せば良かったものを」

満足そうに眺めてから剣を宝物庫に入れた

「さて、俺は戻るとするか」

コイツと居るとイライラする
早く立ち去りたい

後ろで騒いでいるが気にしない

第十六話（後書き）

今回は短かったです

ギルガメッシュはこんな感じの性格だと思う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3687m/>

創造の魔法使い

2010年10月9日12時42分発行